

Vol.
18

Shumei International

NEWSLETTER



Shumei International is dedicated to improving the human community by restoring the environment, fostering a deep appreciation of beauty and the arts and cultivating leadership among the next generation.

The organization was founded on the philosophy of Mokichi Okada, who taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will uplift human society and enable a truly balanced and sustainable world.

Shumei International has established programs around the world with a focus on Natural Agriculture.

Shumei International

NEWSLETTER

Vol.18



【表紙】

タンザニアさくら女子中学校の生徒たち：収穫後、一人ひとりの思いを込めた翌年の種まき用メイズが入った壺を囲んで記念撮影。



秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観を提唱したいと考えています。そして、私たち同様の目的を持つ世界中の人たち、団体と協力しあい、世界平和に貢献していくことを目指しています。



Special Topics

3 ザンビア自然農法プロジェクト近況報告

アラン・今井(秀明インターナショナル理事 開発途上国支援担当)

8 タンザニア さくら女子中学校 自然農法支援報告

酒井 賢治(秀明自然農法ネットワーク)

12 本物の農業とは イギリスの有機農業会議でのザンビアプロジェクトの発信

農業とは世界を変えることのできる生きる糧

バーバラ・ハチブカ・バンダ(ザンビア自然農法開発プログラム 代表)

16 種と人間の物語 その優しさと精神性

ケン・グリーン(ハドソンバレー・シード・カンパニー)

22 おおつち美し米 大槌の地に実った3本の稲穂

多田 立伊(Shumei岩手ボランティア担当)





ザンビア自然農法プロジェクト 近況報告

秀明インターナショナル理事 開発途上国支援担当 アラン・今井



第10回自然農法ショーを終えて

2005年11月、ザンビアで在来種の秀明自然農法によるメイズ（トウモロコシ）の栽培が始まり、翌年3月には無事、立派なメイズを収穫することができました。7月、収穫祭を兼ね、ザンビアの人たちが自分たちの誇りを取り戻せるように、また彼らの失われた伝統文化の復興を助けたいと自然農法ショーを企画しました。そのとき、ザンビアの青年たちがサッカーの試合に熱狂する姿を見て、日本の青年たちも自然農法ショーに参加し、彼らと交流できないだろうかと思いました。しかし、ザンビアの片田舎で暮らす農民たちが、ほとんど見たことのない、きれいな服や靴、帽子、サングラス、そしてカメラや携帯電話を持った日本の青年たちが、そこで生活している人々の姿を傍観するようなことは、彼らに失礼ではないだろうかかとためらいました。

それから10年、ザンビアの田舎でも携帯電話は必需品となり、舗装された道路もできて都会が近くなりました。人々

の精神面もいい意味でもネガティブな意味でも大きな変化が訪れ、今では日本人が行っても驚かれるようなことはありません。人は利便性を追い求め、物質主義に走りがちです。物質と精神のバランスの取れた世界を創造することが、私たちの願いです。物質主義が怒涛のよう^{どとう}に押し寄せ、彼らの生活を変えていっても、伝統文化や、民族的な精神性は大切なものとして残して欲しいと願っています。

2015年8月、日本の青年たち33人と共にザンビアを訪ねました。当初ムババラから始まった自然農法ショーも三つの地区に拡大し、第10回自然農法ショーは3地区が一堂に会して行われました。そのとき日本の青年たちが残してくれたものは二つ。今まで脇役だった子どもたちに遊びを用意し大いに楽しませてくれたこと。そしてもう一つは10年にわたって共に活動してきた農民たちとの絆をより強くしてくれたことです。

現地の資源を利用した 自然農法の取り組み

ザンビアの気候は11月から3月までの雨季と4月から10月までの乾季に分かれます。5月にメイズが乾燥して収穫を終えた後、茎や葉などは家畜の餌として食べられ、畑は裸の状態になって次の雨季を迎えます。11月の終わりごろ最初の雨が降って土地が柔らかくなったところへ牛の労力で耕し、種をまくというのが恒例です。

毎年雨季の終わりごろ、3月になるとザンビア南部の野原は胸まで届くほどの草で覆われます。2013年より、この草を刈り取って堆肥として準備し、5月の収穫後の畑に敷き草をして次の11月雨季が来るまで被覆をするという試みを始めました。肥料を全く使用しない自然農法で、地元の自然環境の中に育つ植物を利用するという持続可能な農業としての取り組みです。最初の雨が降った後に、種まきをしてもしその後の雨が続き、まいた種がダメになってしまうことも度々起こっていました。そういったとき枯草で被覆をしていることにより土中に水分が保たれます。逆に大雨が続いて表土が流されるといったとき、被覆している畑では敷き草が土を守ってくれることにもなりました。今そうした取り組みが徐々に農民の間に拡がりつつあります。2016年の自然農法ショーの展示で農民たちがその取り組みの模型を作って紹介しているのを見て、とてもうれしくなりました。

ペンバ地区の小学校の進展

ザンビアの農村地域では学校施設を設立し、生徒たちが集まり、先生のための住宅施設を整えれば、基本的にザンビア政府が教師を派遣してくれることになっています。2015年8月に開校したペンバ地区の小学校プロジェクトは幼稚園からスタートし、最初は地元の青年に園児のお世話をお願いしました。2016年1月、開校準備が整いました。お土産のお菓子を持って学校を訪ねると、男の子と女の子に分かれてきれいに列を作って手を洗い、教室に入っていました。彼らを見ていると将来に向けて夢が広がります。そして9月になって待ちに待った先生がやって来ました。さらに二



敷き草の展示

つ目の校舎の建設が始まり、男性たちはレンガ焼きに忙しくしていました。Shumeiからの寄付でミシンを購入し、首都ルサカで子どもたちのユニフォームになる生地を購入しました。洋裁の先生に来てもらって母親たちが子どもたちのユニフォームを縫い上げます。その後の自然農法ショーではミシンの使い方を習った農民たちが洋裁術を披露していました。どんどん成長する子どもたちのユニフォームを親たちの手で作ることによって費用を軽減するとともに、その技術を修得した女性たちにとっては副業としての収入につながるという狙いです。



ユニフォームづくり

ペンバの小学校に立って360度眺めてもほとんど家は見えません。自然の中に点在する家々から30分、40分の時間をかけて子どもたちが登校してきます。広大な範囲に広がるペンバ地区、あまりに遠すぎて学校に来られない子どもたちがほとんど。親たちの要望で2018年暮れ、男の子、女の子それぞれ10人は生活できる寮を建設することが決まりました。また二人目の先生を迎える家も完成し、2019年1月より正規教師二人体制となりました。

ここに至るまでのいきさつを振り返ると、ザンビアプロジェクトの初期のころ、地元の学校を訪ねると、段ボールの上に子どもたちが鉛筆で描いたアフリカの地図を天井から吊り下げて展示していました。真っ白な紙、12色のクレヨンなんて、



子どもたちの絵



ペンバ地区 小学校第2校舎のオープニング

子どもたちは見たこともないのだなと思いました。心ある人たちの支援でたくさんのクレヨンセットと画用紙を持ち込み、自然農法ショーに子どもたちの絵を展示しようと試みました。しかしあまりに多くの子どもたちで、一人当たり2、3色になってしまい、限られたクレヨンで描かれた動物や家の絵などが木に巻きつけてありました。一生懸命一枚一枚写真に収めながら見ているのは私一人で、大人たちは全く関心がないようでした。広い範囲で暮らしている農民たちの子ども全員に対してサポートすることは困難なことから、学校を作って集中的に援助できたらと、ペンバの学校建設のプロジェクトが始まりました。

ごく一部の教育の機会に恵まれ、高等教育を受けた若者たちはザンビアを出て、アメリカや、ヨーロッパへ出て行くという、ブレイン・ドレイン（頭脳流出）現象がアフリカの問題の一つです。学校の周りで自然農法を実施し、そのお手伝いや芸術教育に力を入れて、彼らの育った周りの美しい環境に誇りを持ってほしいと思います。そして将来は自分の立身出世のためではなく、地元に戻って来て地域の発展のために貢献する若者に育ってほしい、そんな学校にしたいと考えています。

タンザニア さくら女子中学校との交流

2016年1月、タンザニア、アルーシャ地区バンガタ村にタンザニアの将来を担う女性リーダーの育成を目指して「さくら女子中学校」が開校しました。創立者の一人である故岩男寿美子先生との出会いから、Shumei から自然農法実施経験者を派遣して学校内での野菜栽培が同年8月より始まりしました。全寮制の学校運営において生徒たちの食費がかなりの出費となっていることを伺い、無肥料・無農薬、自家採種で進める自然農法食材の提供が可能となれば、経営面でも大きな利益となるのではないかと考えました。副食としての野菜に続く課題は主食のメイズです。10月に同校を訪問し、メイズ栽培のための圃場選定と栽培支援のあり方について検討しました。タンザニアでは在来メイズの種子が手に入らないとのことでザンビアから自然農法10年目の自家採種の種子を持ち込み、2017年3月に種まきをしてもらいましたが、その後の干ばつにより芽が出ませんでした。

タンザニアの雨季はザンビア同様に2回あり、3月に始まる雨季がメイズ栽培の適期とのこと。2018年は3人のザンビア農民たちが在来メイズの種子を携え現地を訪問、自然農法によるメイズ栽培が本格的に始まりしました。その後の恵まれた雨でメイズは順調に育ちましたが、5月には地域全



建設中のムババラ職業訓練校

域で害虫が大発生、多くの農家が農薬散布する中で、自然農法メイズは完全無農薬でそれを乗り越えることができました。8月、Shumei から駆けつけた自然農法実施者とともに、バス1台をチャーターして生徒たちが収穫に参加。収穫したメイズに感謝の祈りをささげ、翌年用の種子を確保しました。

2019年3月にザンビア農民2名がさくら女子中学校の圃場にメイズの種まきの指導に行きました。今回は生徒も参加して素晴らしい自然農法支援が続いています。

岩男教授と共同創始者であるフリーダ・トミトさんはザンビア自然農法ショーに参加し、将来この学校を卒業する生徒をザンビアで建設中の小学校に研修教師として派遣してもらう案なども出ています。自然農法と教育を通してザンビアとタンザニアの交流が深まる可能性も楽しみです。



種まき

マラウイの団体との交流をきっかけに 職業訓練校開設

2012年にブラジル、リオデジャネイロで行われたリオ+20（国連持続可能な開発会議）に参加し、長年マラウイで活動している英国人シャリフィン氏との出会いから、2016年3月にザンビアの隣国マラウイを訪ねました。氏の紹介で青年たちへの職業訓練施設“グリーン・マラタ”を訪問、現在は卒業生たちが施設運営を担っています。農業部門で自然農法を取り入れることになり、代表者が2017年8月ザンビアでの自然農法ショーに参加しました。マラウイでの秀明自然農法の始まりです。

ザンビアでもムババラ地区のプロジェクト本部敷地内に、職業訓練校開設が決まりました。2018年11月、アメリカで大工仕事に携わっている青年とボランティア青年がザンビアに一月滞在し、地元職人の立ち上げたレンガの壁の上に屋根を完成させました。ムババラでの職業訓練校ではもちろん自然農法の指導、芸術活動推進を外す事なく、縫裁、大工、左官、電気工事などを教育していけたらと考えています。グリーン・マラタでの運営経験の学びと将来のパートナーシップの可能性も合わせて、本年3月にマラウイ訪問を予定しています。



ザンビア自然農法プロジェクトが国連持続可能な開発目標（SDGs）に貢献

今後の自然農法ショーへの 日本の青年参加

次の自然農法ショーへの日本からの参加は 2020 年と考えていましたが、参加希望者が多かったため、昨年、小規模で行いました。ペンバ地区の小学校での第 2 校舎竣工のお祝いに参加しました。純粹に手を広げてワーツと飛び込んで来る子どもたちや女性農民たちの出迎えに心温まりました。

ムババラ地区での自然農法ショーには、チカンタ・ペンバ両地区の農民たちもキャンプ準備をして駆けつけての、合同開催です。

11 名の青年たちは和太鼓の演奏に合わせたダンスで、1,000 名を超える取り巻きのザンビアの人たちを一つにまとめました。最後はたくさんの子どもたちもステージに駆け上り、大きな盛り上がりとなりました。2 日目はおむすび、カレースープ、きな粉団子などを準備して大人にも子どもにも喜んでもらいました。Shumei の青年たちはしっかりと自然農法ショーの中に溶け込んでいました。また電気も水道もない大自然の中でのホームステイは彼らにとって貴重な体験になったことと思います。

後ほど「ザンビアの将来を担う子どもたちに想いを伝えたい」という気持ちで取り組んだとの青年の感想を聞き、私自

身がとても新鮮な気持ちになりました。

今後は一年おきにムババラ地区での 3 地区合同ショーとペンバ地区とチカンタ地区の 2 カ所のショーにムババラ地区の農民たちが参加するという形にすることに決まりました。この次は来年 2020 年。どのように成長してゆくか楽しみにして。



自然農法ショーでメイズをあしらった衣装をまとう



さくら女子中学校 校舎

タンザニア さくら女子中学校 自然農法支援報告

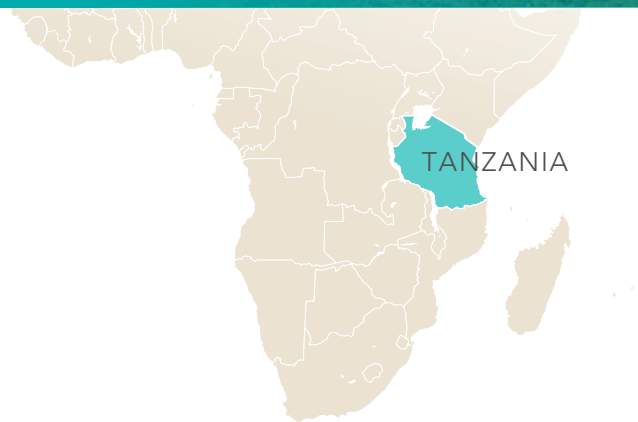
秀明自然農法ネットワーク 酒井 賢治

2018年8月、2年ぶりにタンザニアのアルーシャにあるさくら女子中学校を訪問しました。この学校は、タンザニアの発展に貢献する女性リーダーの輩出を目指し、少女たちが安心して学ぶことのできる教育環境を提供するため、一般社団法人キリマンジャロの会が中心になり2016年1月に開校しました。

アフリカでは多くの女子が学校に通えるのは小学校までで、大半は十代半ばで結婚させられ、たくさんの子どもを産み、貧困から抜け出せないまま一生を終えます。タンザニアでは、小学校が7年間、中学校が4年間、高等学校が2年間ですが、少女たちは、中学校に進学して勉強したいと願っても教育機会が与えられず、勉学を諦める女子がたくさんいるのが現状です。さくら女子中学校では、貧しくても優秀な生徒はキリマンジャロの会から里親サポートを受けています。

前回の2016年の訪問では、生徒たちと共に校内に圃場とさくらガーデンを作りましたが、今回は学校の隣地に自然農法の圃場や鶏小屋を作って、生徒たちが安全な野菜、そして主食のメイズを食べられるように支援しました。

この2年間で圃場の変わりように驚きました。植えたバナナが大きく育ち、圃場内に適度の日陰を作っています。アフリカの日差しは強いために森に近い畑作りが基本となってい



アフリカでも有数の大自然に恵まれ、日本の約2.5倍の国土を有している。高地と低地を有し、北東部にはアフリカ最高峰のキリマンジャロ山がそびえる。人口は約5,200万人。スワヒリ語を国語とし、アフリカ在来の言語が大きな役割を果たしている数少ない国家。GNP（国民総生産）の40%、輸出の80%は農業で占められており、主な農産物はコーヒー、綿花など。



バナナがガーデンに日陰を

ます。33名だった生徒たちは現在では120名に増えました。食べ盛りの子どもたちです。日々の食事を作るのも大変ですが、主食のメイズが自然農法で提供できればと思いました。

企業の寄付により、学校から車で1時間のところにある10エーカー（4町）の圃場でメイズの栽培が可能になりました。早速、在来種のメイズの種を探しましたが、タンザニアで購入できる種子はF1でハイブリッド種子しかありませんでした。そこで、Shumeiが支援しているザンビアの農民たち3名が、昨年の3月に車で長時間、運転して在来種のメイズの種を圃場に持って来て種まきの仕方を教えてくれました。

昨年、世界各地で異常気象が起きていましたが、タンザニアでも雨季に雨がほとんど降らず、それによって虫害が頻発し、その被害はタンザニア全土に及び、慣行農家は何回も農薬散布を行っていました。この中学校の圃場でも虫害が発生し、心配された学校責任者のフリーダさんは農薬の使用について尋ねてきました。せっかくここまで育ったメイズが、収穫できなくなるかもしれないからです。しかし、自然農法では農薬を使用しません。清らかな土、種、そして作物の力を信じます。何より大切なことは、大自然に委ね、祈ることです。日本や海外における自然農法の実績と理念を伝え、フリーダさんも理解を示されました。みんなが見守る中、祈りが通じたかのように、待望の雨が降り出しました。

雨によりメイズも元気に育ち、害虫の被害を受けてもたくましく成長し、自然農法の素晴らしさを再確認しました。この体験から、学校関係者の自然農法に対する思いもより強くなったことでしょう。安定して自然農法のメイズが収穫できれば、学生たちは日々自然農法の食事ができ、より健康になっていくことでしょう。

学校から1時間、車で揺られながら圃場が見えてきました。収穫間近の畑を歩き立派に育ったメイズを見るにつけ^{あんど}安堵しました。ザンビアの農民の方々に感謝です。



フリーダ・トミトさん



メイズの収穫

来年以降も持続してプロジェクトを成功させるためにはきちんと種採りをする必要があります。種採りは次世代に良いものを残していくため、種の質を吟味していく必要があります。圃場近くに住んでいる農家の方をお願いすることも可能ですが、生徒たちが食べる物は生徒たちが率先して参加することが、教育として大変重要なプロセスになると考え、校長先生や先生方に自家採種の必要性、生徒が主体的に参加することの大切さを伝え賛同していただきました。

これまで生徒たちは学校から離れたこの圃場に行ったことはありませんでした。収穫当日は晴天に恵まれ、バス1台をチャーターして高学年の生徒33名が収穫に行きました。バスの中で生徒たちは歌い笑い、外に出ることがうれしそうでした。

圃場に到着し、先生が生徒に大きい釘を1本ずつ渡していました。何に使うのか不思議でしたが、一列に並んだ生徒は釘を器用に使いメイズの皮を剥いで実をもぎ始めました。初めて見る光景です。普通は幹を鎌で刈り取るのですが、足で幹を踏み倒して、次々と収穫していくそのたくましい姿に驚きました。生徒たちは実家が農家で、同じようなことを家の手伝いをして慣れているそうです。2時間以上、休憩なしで作業する生徒の体力に驚きました。日本の同年頃の生徒は、同じ作業をしても30分持たないように感じ

ます。みるみるメイズが山と積まれていきました。

さっそくこのメイズを学校に持って帰り選別を行いました。今度は収穫には行けなかった生徒たちの出番です。80名程の生徒が集まり、実が詰まり形の整った物を来年の種用に残します。生徒たちはメイズの実を一粒ずつ、慣れた手つきで次々とほぐしていきます。目標120kgは大変な作業ですが、生徒たちは本当に楽しんで取り組み、無事目標分を確保できました。保存用の壺に種を入れる際、生徒たちにもっと種に対して、自然に対しての意識を持ってもらいたいとメイズの種を一人ひとりが一握り持って、皆で大きな円になってもらいました。そして作物を育ててくれる太陽、水、風、大地に祈りをささげ、壺に祈りながら種を入れてもらいました。この種を採るという、昔は当たり前だった「自家採種活動」が生徒主体でできました。次の年の種まきが楽しみです。

残ったメイズを粉にして現地の主食であるウガリにしてみんなに食べてもらいました。生徒や先生方も慣行農法のメイズと比べ、とても甘くておいしいと味の違いに驚いていました。

2019年3月にうれしい報告がさくら女子中学校からありました。

ザンビアから訪問した2名の農民たちの指導の下、さく



実をほぐす作業

ら女子中学校の圃場でメイズの種まきが行われました。初めて生徒たちも種まきに参加して自然農法を実践しました。平日ですが、フリーダさんは校長先生と相談され、1日1クラスずつ参加し、2日間で65名がザンビア農民の方々と一緒に種まきを行いました。現地は夏で暑い気候でもあるため、かなりハードな作業だったようです。ザンビア農民から種まきの基本をキッチリと指導され、生徒たちは頑張って2エーカー（8反）の面積の種まきが終わったそうです。ザンビア農民と打ち解けて生徒たちにとって貴重な時間となりました。保存していた種は虫に食べられたものもあり、選別が必要だったそうです。種の保存管理が今後の課題です。

フリーダさんはShumeiのサポートと自然農法支援の寄付により、無事に生徒たちが学校から離れた圃場にバスで移動して自然農法活動ができたことに感謝されています。

生徒たちは、自然農法を通してメイズの収穫、自家採種、種まきと体験が許されています。そして自分たちが育てたメイズを食べて学業に励むことで、心の教育が実現できると思います。



祈りながら保存用の壺に種を入れる



自然農法のウガリ



本物の農業とは

イギリスの有機農業会議でのザンビアプロジェクトの発信

会場のオックスフォード市民ホール

このたび、秀明インターナショナル（以下 Shumei）とパートナーシップを結んでいる英国土壌協会からの招待を受け、2019年1月3日・4日にイギリスのオックスフォードで開催された有機農業会議「Oxford Real Farming Conference（オックスフォード・リアル・ファーマーミング・カンファレンス）」に Shumei のスタッフが参加しました。

この会議は「本物の農業とは何かを迫り、その理解を深め、自然環境に配慮した農業を基盤とした生活圏の構築」を目指しており、もともと同じ時期に開催されていた慣行農業の会議を意識して10年前に始まりました。当初は80人ほどの参加者でしたが、徐々に参加者が増えていき、今年は1,000人以上の方が参加され、チケット待ちの方が何百人もいるという大変人気の会議です。

オックスフォード市民ホールをメイン会場とし、10カ所のホールや会議室でプレゼンテーションやワークショップが行われ、展示ブースも設けられていました。ワークショップは技



発表するバーバラさん

術的な内容のもの、ビジネス的観点から社会貢献や環境問題、また食や栄養、哲学的、心理的内容に至るまでさまざまでした。今回、メイン会場にて Shumei ザンビアプロジェクトを紹介する機会を頂きました。Shumei が支援している NADPZ（ザンビア自然農法開発プログラム）の代表バーバラ・ハチブカさんが発表し、多くの聴衆から賛同を得ました。

農業とは世界を変えることのできる 生きる糧



NADPZ（ザンビア自然農法開発プログラム）代表
バーバラ・ハチプカ・バンダ

農業の原点に返って

私はバーバラ・ハチプカ・バンダと申します。ザンビアから来ました。今日は農業とはどういうことか、という原点に戻ってお話したいと思います。私は農家の3代目です。若い頃は農業なんて格好悪いと思い、ジャーナリストを志していました。しかし、結局は農業に戻ることにしました。正直なところ、アフリカの農家の私が今日何を話せばいいのだろうかと考えていました。イギリスをはじめ、ヨーロッパの国々は農業先進国なのですから。しかし、ヨーロッパの農家の皆さんと農業の原点に戻るために今日ここにいるのだと気が付きました。先進技術や最新のデータなどをどれだけ取り込んだとしても最終的に、農業は“情熱”なくして成り立ちません。飢餓撲滅のためでもなく、お金を儲けるためでもなく、農業とは世界を変えることができる生きる糧なのです。

ここで私の Shumei との出会いと、どのように南ザンビアの 5,000 人以上の人たちの生活を変えたか、そしてどのように他の地域にプロジェクトが広がっていったかをお話します。ザンビアの国土は 75 万平方キロメートルで、アメリカのテキサス州より少し大きいくらいです。しかし、そのうちの 14% の土地しか農業に使われておらず、6% しか灌漑^{かんがい}が行われていません。ザンビアの GDP（国内総生産）の 19% しか農業は貢献していません。それでも人口 70% は農業に頼って生活し、地方の農民はほとんど収入がありません。政府は全くと言っていいほど農業に投資していないので、1 日 1 ドル以下で生活している人たちが数多くいます。

秀明インターナショナルとの出会い

私がどのようにこの問題に取り組み始めたかという、2004 年、国連が取り組んでいるミレニアム開発目標 MDGs（現在の SDGs）のプログラムに参加していたときに、自然農法を推進している Shumei と知り合いました。自然農法は農薬を使わず、畑には何も投入しない（ゼロ・インプット）、持続可能な農業です。ハイブリッドの種も使わず、自家採種に重きを置いています。私はザンビアの女性農民に自然農法を推進したいと思い、Shumei にザンビアでの自然農

法プロジェクトを持ち掛けました。このプロジェクトの最大の目的は、貧困を減らすこと、そしてジェンダーの平等を実現することです。ザンビアの女性には重要な労働力であるにも関わらず、国づくりには関わらず、恩恵も受けられず、国の発展から取り残されがちです。ですから自然農法を通して女性農民に良い影響を与えたかったのです。また、畑に何も入れず、ハイブリッドの種を使わず自家採種するということも重要でした。農民には種や農薬を購入できる金銭的余裕はありません。国の援助も限られているため、農民は取り残され、十分な食糧を生産することができず、飢餓に陥っていたのです。

2004 年に Shumei は勇敢にもザンビアまで来てくれ、女性農民たちに会いました。自然農法が本当にうまくいくことを見せるため、20 人の小規模農家を選び、モデル圃場を作ることにしました。ザンビアには「ハイブリッド種の自家採種をしてはいけない」という法律があるため、私たちはまず農村部に行き、在来種の種を探しました。そしてメイズという私たちの主食の 8 種類の在来種の種を見つけました。Shumei はその種を農家から買い集めて、デモンストレーション農家に渡し、自然農法を教えました。その 2 年前からずっと干ばつが続いていたこともあり、初年度の収穫は必ずしも豊作とは言えませんでした。翌年は、種まきの時期を少し早めることで気候変動に対処し、ようやく良い収穫量を得ることができ、コミュニティの女性たちを感化していきました。最初は 20 人から始まったプロジェクトが、100 人になり、500 人になり、いつの間にか 1,200 人に広がっていきました。在来種の種の貯蔵も増えていきました。



女性農業組合のメイズ

求めているものはコミュニティ

私たちが求めていたのは在来種の種だけではなく、持続可能な農業を推進するコミュニティでした。しかし多くの男性は非協力的で、私たちはコミュニティ全体を巻き込んで、もっと大きな規模でプロジェクトを考えなければならないと思い、もっとたくさんのメイズを育てて、貯蓄するようになりました。バリューチェーンシステム（価値・利益を共有するシステム）を考えなければなりません。それは女性農民に良い刺激を与え、彼女たちの夫たちにもプロジェクトの一員としての認識を持たせ、参加を促すことにより、実際にコミュニティやそれぞれの家族に現金収入をもたらすようになりました。そして NPO を立ち上げ、このプロジェクトそのものがもっと収入を生むような方向に成長させていきました。貧困層の減少と現金収入の増加、そしてザンビアの他地域の人たちが活動に注目するレベルにまで女性たちをスキルアップさせていったのです。それ以降、別の地域も含め、より多くの人たちがデモンストレーション農家に足を運ぶようになりました。彼らは自然農法を自分たちの地域でも実践することができるのか、もっと知りたがっていました。

2006 年に初めて自然農法ショーを開催することにしました。プロジェクトを始めた女性たち、プロジェクトの内容、どのようにプロジェクトが広がっていったかを紹介したショーでした。500 人の女性農民が主となって、彼女たちがさまざまな地域から集めた在来種を展示し、それと同時にザンビア固有の文化にも焦点を当てました。それぞれの地域のリーダーや部族のチーフの協力もあって、3 日間のイベントに南ザンビアの各地からたくさんの参加者が訪れ、当初予想していた 1,000 人を大きく上回る 1 万人超の来場者を数えました。

たった 20 人から始まったプロジェクトが 4 年後には 3 つの地域で 5,000 人をも巻き込むプロジェクトになるとは、誰が予想したのでしょうか？ これは小規模農家自身の固い決意があったからこそ実現できたのです。海外の NGO が農村地域に来て、人々を教育し、インフラを整え、そして去っていくというのはよくある話です。続くのはせいぜい 1、2 年です。しかし私たちはこのプロジェクトを永遠に続けたのです。それは農民自身がこのプロジェクトを運営し、参加し、プロジェクトの一部になり、持続可能なモデルを作るということです。プロジェクトが農民のものでなければなりません。私たちは農民がお互いに協力するような体制、協同組合を作りました。それはビジネスモデルにもなり得るからです。そうすることによってビジネスが成功すれば、農民はその成功の一部になることができます。畑に農薬などを何も入れないということは、その分手間がかかり、収穫

量が減ります。しかし私たちが強調したかったのは、何トンもの収穫量は要らないということです。自分たちの生活に必要な分があり、このビジネスモデルに参加していれば、サプライチェーンで売ることができます。自己継続型のビジネスモデルを作れば、Shumei の支援がないところでも自立することができます。協力体制というのは、農民をトレーニングするというだけでなく、現金収入を得ることができるビジネスモデルを作るということです。農民たちはそれぞれ 2～10 ヘクタールの畑でメイズを作ります。収穫した後はそれを集めて、訓練施設の倉庫に貯蓄します。協力体制の仕組みにより、このプロジェクトの NPO を通して一般が買える価格で各地域の私営企業に供給します。その他にもスーパーマーケットやホテルなど、たくさんの企業にメイズを買ってもらえないか交渉しました。



自然農法ショーでの展示・販売物

自然農法によって気候に関わらず安定した収入

2008 年ごろからこのビジネスモデルは成功し始め、今では 2,000 人を超える農民が自然農法で作物を作っています。このプロジェクトの良いところは、コストがかからない農業だということです。一般の小規模農家はハイブリッドの種や化学肥料、農薬を買うコストを考えなければなりません。最近の気候は 1 年間の降水パターンから大きく外れ、急変することが多くなっています。そんな気候のときには、いくらハイブリッドの種を使い、農薬や化学肥料を使ってもメイズが成長するという保証はありません。しかし自然農法では在来種を使っているため、地中深くまで根を張ります。在来種自体が気候変動に対して適応力を持っているのです。根が深ければ深いほど、そのメイズには回復力があります。また早めにメイズを植えてその上を枯草で覆うことによって、土の中に水分を保たせることも始めました。多くの農家によって、この方法でより収穫を得ることが実証されました。ハイブリッド種の畑と自然農法の畑を比べると、



気候が悪い年には自然農法の畑の方が収穫量が多く、その年の雨のパターンがどのようなものであっても、在来種を植えた農家は収穫を得ることができるということが分かりました。アフリカでは「見ることは信じること」とよく言うのですが、人から聞くのと自分の目で見るのでは全く違います。これは農民たちの生計がかかっているのですから、この結果を農民が自分たちの目で見て、うまくいくということが分かった訳です。

政府にもこの在来種と自然農法が実際に役立つということを伝え、支援を求めようとしてきました。他の NGO とも協力して、ザンビアの農村地域に持続可能な農業を広めようとしてきました。しかし順調には進んでいません。この 10 年間で大統領が 3 人変わりました。アフリカではよくあることですが、大統領が変わるたびに政府の人事を全て入れ替えるため、その都度プロジェクトの紹介を一からしなければならないのです。そして、このプロジェクトの知名度をアフリカでどのように上げていくかということも課題でした。多くのアフリカの農民の思いは、もっとたくさんの収穫量を得て、食料を得、そしてお金を得たいということです。多くの人は、それは化学肥料や農薬、ハイブリッドの種に投資することによって実現できていると思っていますが、私たちはそうではないことを証明しました。小規模農家は自然農法プロジェクトによって安定した収入を得られるようになったのです。



慣行農法のメイズ（左）と自然農法のメイズ（右）

アフリカの地から世界に向かって

気候変動に関する会議において、このプロジェクトモデルは気候変動への対応策となりえます。気候変動の会議は毎年世界中のどこかで開催されていますが、農民の声はそこには届いていません。クライメート・スマート農業（気候変動対応型農業）という言葉は、多くのアフリカの政府や NGO では「農薬や化学肥料を使いなさい」という意味に変換されます。「適切な時期に、賢く農薬や化学肥料を使

いなさい」ということです。アフリカ大陸の 70% の人々がこのような農薬などを購入する余裕がないにも関わらず。ですから私たちは「飢餓をゼロに」と「ジェンダーの平等」という SDGs の目標が気候変動対策の重要な要素の一つであると考え、気候変動の国際会議に参加し始めたのです。私たちのような小規模農家の声が反映されなくてはなりません。飢餓の撲滅と言って、遺伝子組み換え作物の推進が行われているのです。そんなものはアフリカでは高すぎて買えませんし健康面への安全性も確保されていません。経済的に余裕のない農民を負債へ陥れる企業の罠にかからないように農民を守らなければなりません。例えばインドでは、農民は農薬や種を買うために借金をし、作物の出来が悪ければその借金を返すことができず、たくさんの農民が自殺しています。アフリカでも同様なことが起きています。これらの肥料、ハイブリッドの種はどれも豊作を保証できません。だから私たちは本当にアフリカの貧困を無くすることができる解決策を探していました。私にとってそれは Shumei とパートナーシップを組むことでした。国境を越えたつながりを、ネットワークを活用することで、小さな力しか持たなかったアフリカの農民が気候変動への対応策を提案し、共有できる環境をつくり始めています。

現在 Shumei はザンビアだけでなくガンビアやタンザニアにも活動を広げています。タンザニアのさくら女子中学校では、生徒 200 人の寮生活のための食糧を生徒たち自身が育てています。また、マラウイでは小規模農家の若者の支援を行っています。アフリカの多くの若者は農業を良い職業だと思っていませんが、マラウイの若い農民が農業は有望な職業だと認識し、より多くの若者に参加してもらえるように支援しています。

今日は農業の原点に戻るための提起でしたが、イギリスの皆さんにもこのような活動に参加していただきたいと思います。今日はお越しいただき、ありがとうございました。



国連持続可能な開発目標（SDGs）を掲げて



種と人間の物語

その優しさと精神性

2018年11月、秀明インターナショナルは在来種・固定種の保存と普及を通して持続可能な社会づくりに貢献するため、ハドソンバレー・シード・カンパニーとパートナーシップを結びました。同社を創設したケン・グリーン氏が来日し、秀明自然農法農家への訪問や、持続可能な社会を志す消費者との交流が行われ、ご自身の活動などについてお聞きしました。

ケン・グリーン

Ken Greene

プロフィール

ニューヨーク州ガーディナー公立図書館の司書として働いた後、2004年に種子の保存活動を行う「ハドソンバレー・シード・ライブラリー」を創立。その後、「ハドソンバレー・シード・カンパニー」に社名を変更。在来種種子の栽培・保存と販売に取り組み、種子のメッセージを芸術として発信すると共に、全米各地での講演会等にも登壇している。（オーガニック種子協会理事、全米オーガニック種子生産者会議準備委員会委員）



ケンさんの活動について教えてください

現在、ニューヨーク市から北に3時間ほど車を走らせた郊外の林に囲まれた場所にあるハドソンバレー・シード・カンパニーをパートナーのダグラス・ミュラーと共に運営しています。

私はもともと農業に関係した仕事をしていただけではありません。ただ、子どもの頃から自然の中で過ごすことが好きで、自然の中にある小さなものに興味があり、心を惹かれていました。

2000年からニューヨーク州ガーディナー市の図書館司書として働いていたとき、種の多様性やモンサントなど大企業に関する本に触発されて、まず自宅の庭で植物を育て種採りを始めました。その後、その図書館を利用して、全米初の「シード・ライブラリー（種の図書館）」を立ち上げました。これは、地域の農家や園芸家が実際に図書館で種を見て、その種を持ち帰り、種をまき、収穫して採れた種を図書館に戻すというシステムです。現在は全米の400カ所でシード・ライブラリーの活動が行われています。

会社では現在、約400種の在来種の種を扱い、そのうち40%を自分たちの圃場で賄っています。また種の勉強会や農家と消費者、シェフなど人と人をつなぐ活動もしています。



ハドソンバレー・シード・カンパニー

ケンさんにとって「種」とは何でしょうか？

種とは生きている生命体です。私はこの15年間、「種とは何か？」という疑問をずっと問い続けています。毎シーズン、種をまき、小さな種の変化を見て、謙虚な気持ちになります。土から芽が出るたびに、毎回何かに驚き、その生命力にとっても感動しています。私は種の保護者であり、自家採種をする者であることを光栄に思い、誇りに思っています。

ます。こんなに小さなものが、大きな植物に変わり、そしてたくさんの実をつけます。本当にそんなことができるのかと。そして、それは毎回奇跡であって、決して終わることがなく続いていき、いつも私を驚かせます。



一番おいしく食べられるときに収穫して植物の一生を終わらせてしまうより、種を採る最後まで植物を育てること、種の一生に携わることに喜びを感じています。

種は発芽し、花を咲かせ、受粉が行われ、実り、再び種を作ります。人類はこの種のライフサイクル(生命の循環)の無い世界に生きたことはありません。私たち人類の文明は、種と種を大切にする人たちによる農業が基盤になっていると言っても過言ではありません。種は軽視されがちです。それは私たちがほとんどの場合、種そのものではなく、その作物を食べているという感覚が理由の一つに挙げられます。私たちは、普通、種とは何なのかということを深く考えません。種は小さいですし、動きません。しかし、種は、生きているのです。

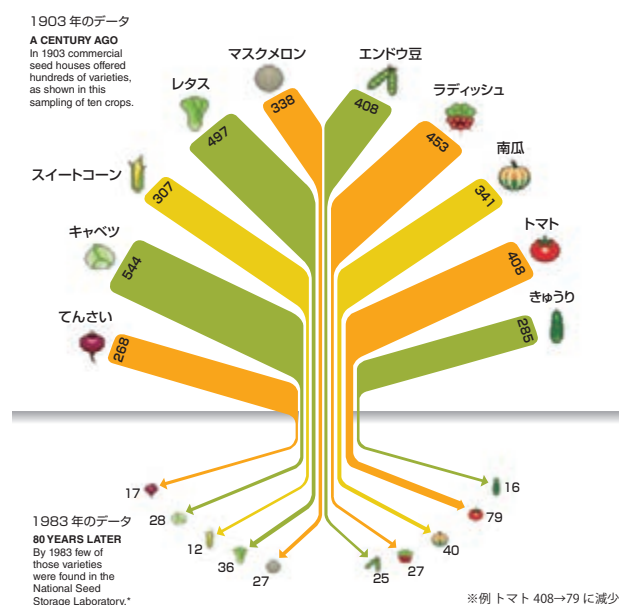
秀明インターナショナルとのパートナーシップについて

Shumei との出会いが私の心を豊かにしてくれました。単なる「農」ということでなく、精神性や美しいものを大切にするという私たちと同じ志を持つあなたたちと出会えたことをとてもうれしく思います。そして、自然農法で自家採種を行ったら、その種が自然農法に適した種になり、幸せて健康になっていくことでしょう。今回の訪問で、秀明自然農法の生産者たちの熱い思いを聞かせてもらいました。厳しい状況の中、ずっと自家採種に取り組んでこられた努力に敬意を表します。また、提供された食事がとてもおいしく、おもてなしの心を感じました。



ビジョンズ・オブ・ザ・リビング・シード

Shumai がインドのナヴダーニヤ財団と共同で発行した書籍「ビジョンズ・オブ・ザ・リビング・シード」を拝見しました。種の美しい写真に加え、種についてのエッセイがさまざまな視点で書かれていて、大変素晴らしい本だと思いました。その本では、種がどんな意味を持つのかということをとくさんの人が考え、さまざまな考え方や意見によって表現されていました。その中で、特に心に残ったものは「種が非常に肝腎です」という岡田茂吉師（自然農法創始者）の言葉と、「命ある種は、生命体の根源であり、自然の多様性や文化的多様性が具現化したものです」というヴァンダナ・シヴァ博士（ナヴダーニヤ財団）の言葉でした。今後、共に活動できることを期待しています。



野菜の多様性の損失

大切にしているものは何ですか？

私が種について語るとき、大切なポイントが二つあります。

一つは感謝の気持ちです。それは私たちの祖先が植物との関係を築いてくれたこと、そして私たちに備わっている植物との関係を続けていく能力に感謝することです。

もう一つは、種の寛容さ、優しさです。一つの種から一つの植物になり、そしてたくさんの種になります。種が私たちの心と体を養ってくれること、種が国境を超えて移動できることは、種そのものが寛容だからこそです。私たちの祖先は、種(植物)を育て、この種の寛容さを次世代につないでいくことを学びました。人々は種を拡散し、適応させ、さらに多くの人に手渡して、世界規模での文化を築き、生物多様性を実現しました。

種の寛容さに対して、私たちは何をしたのでしょうか？ 種が私たちに恵みを与えてくれる寛容さ、私たちはどうすればこの種の寛容さ、優しさを継承していくことができるのでしょうか？ 種への思いと感謝、人間と種との関係は失われつつあります。

世界の現状についてどう思われますか？

たった 100 年で 80% の種の多様性が失われてしまいました。小麦の場合、かつては 10 万種もありましたが、現在世界で栽培されている 75% はたったの 9 品種です。米にしても色が違うもの、儀式のために使うもの、異なる気候に合うものなど 5 万種以上がありましたが、今は約 50 種しか残っていません。そして今もさまざまな品種が失われ続けています。

この原因の一つは種の商業的な取引によって、種が独占されてきたことです。多くの種会社はモンサント、バイエル、シンジェンタ、デュポン、ダウ・ケミカル の 5 社によってことごとく買収されました。この 5 社も合併などによって今ではたった 3 社によって 90% 近い種の資源が支配されています。種の多様性が失われるということは、同時に種の文化や種とのつながりを失い、祖先との絆を壊してしまうことでもあります。

私は常に、「世の中の役に立ちたい、少しでも良くしたい」と思って仕事をしてきました。しかし、大企業による独占や支配に対して、正直、「自分のような個人では何もできないのではないか、無力なんだ」という喪失感を持っていました。そのころ、私はまだ図書館で働いていました。ある日、女性スタッフのお父さんが亡くなられ、20 年ほど前に収穫されビンに入れられた豆を彼女は図書館に持ってきました。それは彼女のお父さんが大事に保存していた、その品種の最後の種でした。私は発芽させようと試みたところ、五つ発芽し、再生することができたのです。そのとき、「自分が発



芽させたことで、この種の物語が続く。そしてこんな小さな種だけでも、この種には、ものすごく大きな可能性と秘められた偉大な力がある」ということに気がきました。種は小さくてもとってもパワフルなんです。そして、「私も大企業から見れば、たった1人の小さな存在かもしれないけれど、この種のようにパワフルになれるんだ!」と確信しました。

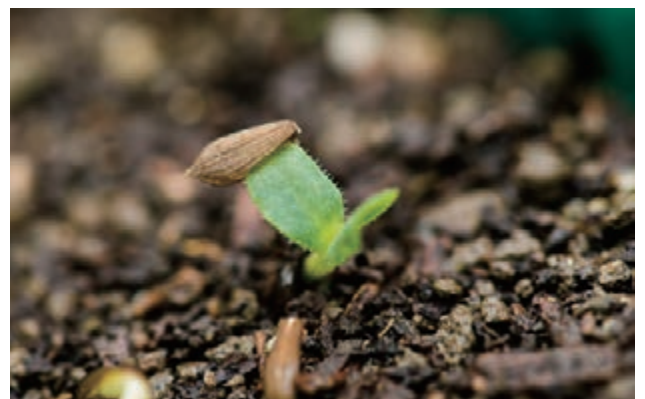
私たちにできることは何でしょうか？

まだ希望は残っています。今からでも遅くはありません。種を守るために、連携したコミュニティづくり、地域の力がとても大切です。大きな企業に対して、同じ志を持った人たちが団結して種を守る強い意志を持って行動することです。

私は、種のパッケージに芸術性を取り入れた発信をしています。種の購入者一人ひとりが「種とは何か」を考えるきっかけになるよう、そしてその種の文化や精神のつながりを伝えられるように、パッケージのデザインをアーティストたちに依頼しています。この10年間で200人近くのアーティストにデザインを依頼しましたが、それは種を単なる商品としてではなく、その見方を変えたかったからです。アーティ

ストは種の精神、種の文化を私たちに再びつなげてくれる役割をしています。彼らは種の物語（種が経験してきた出来事）の中にある政治、社会、文化、歴史、スピリチュアルな物語を表現します。美しくロマンチックな物語や心温まる物語、また心が痛くなるような物語など、そういった全ての物語は種の殻の中に存在し、太陽、土、水、そして私たちが種を育てることによって芽生えるのを待っているのです。

あなたが種を植えるとき、「あなたは種の物語を育てている」のです。種とは希望です。種をまき、育てる以上に希望に満ちたことが他にあるでしょうか。



ハドソンバレー・シード・カンパニーの 種のパッケージを一部紹介します。

あなたが種を植えると、あなたはその種の物語の一部となります。

あなたはどんな物語を付け加えたいですか？



青ヒスイ色のトウモロコシの物語

トウモロコシの原種はテオシンテと呼ばれ、メキシコが原産です。それは小さな実しか実らない草のようなものでしたが、何千年もの時を経て、今では世界的に重要な穀物の一つになりました。この宝石のような甘いトウモロコシのパッケージはトウモロコシの原産地であるメキシコの地図を用いて地理的・文化的に表現しています。



レモンドロップ・ホット・ペッパーの物語

このトウガラシの種はペルーのファーマーズマーケットでシェアされていたものでした。これは鳥が空からマーケットの様子を眺めているようなイメージで、山盛りに積まれた収穫物の中にいる農家の方とその頭上に、浮かび上がっているトウガラシを描いています。このトウガラシから柑橘系のような色鮮やかな辛いソースができます。



聖なるバジルの物語

これは種のサイクルに入るための招待状です。池に小石を落として放射状にさざ波が広がっていくように、この聖なるバジルの原産地、文化、生態系、薬効成分や精神的な癒やしのつながりが広がっていくことを表現しています。聖なるバジルは人々に香りと癒やしを放っています。



ロングアイランド・チーズ・パンプキンの物語

この大きなカボチャは、色と切り口の形がチーズに似ていて、パイやスープを作ると格別に良い香りがします。その滑らかな果肉と筋の少なさから何世紀にも渡って大切に人々に受け継がれてきました。もちろん、栄養価が高いことは言うまでもありません。この最も古いカボチャの一つを秋のお菓子に取り入れてほしいと思います。



ムーン・フラワー（ヨルガオ）の物語

ガーデニングは昼間だけではありません。あなたが眠っているとき、すべての生き物も眠っているという訳ではありません。このヨルガオはあなたが仕事から帰って来るとき、夏の夜に庭で食事をするとき、良い香りを放ち、フクロウなどの夜行性の生き物たちを魅了するように、月の下で輝きます。



デリカタ・スクウォッシュ（カボチャ）の物語

これは最も甘いカボチャの品種です。蜂が花から花へ花粉を運ぶように、筆を使って人の手で受粉させている作業が描かれています。他の野菜と違ってカボチャの種の採りごろの時期は食べごろの時期でもあります。ハドソンバレー・シード・カンパニーでは、種を採ると同時に貧しい人たちのために料理を提供しています。



百日草の物語

メキシコ原産の百日草です。春には畑に芸術と精神性と命が花開きます。ある日、この作品と全く同じように蜂が花に止まっているシーンを一緒に写真に収めたいと思い、カメラを用意しました。花の上に種のパッケージを置き、カメラを構えた直後、一匹の蜂が花に止まり私はシャッターをきました。瞬間的に撮れた奇跡の写真です。



小松菜の物語

日本の切手がモチーフになっています。傘の端がヒントとなり、もう一人の人物が描かれました。これは目の前の畑のその先にあるものとつながるための招待状なのです。それはちょうど切手が遠く離れたところへ手紙を届けてくれたり、種が私たちの先祖や未来、精神など、物質的にはつながることができないものをつなげてくれるのと同じです。

おおつち美し米

大槌の地に実った 3本の稲穂

Shumei 岩手ボランティア担当
多田 立伊



白澤さん（中央）



そのお米に「美しい想い・美しい絆・美しい街」への 願いを込めて

世界三大漁場と呼ばれる三陸沖の北部にあたり、海の恵みが豊富な岩手県上閉伊郡大槌町。人口約15,000人のこの小さな町は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の津波により、人口の約1割が犠牲となり、役場や駅などの市街地が壊滅的な被害を受けました。

ボランティアを募って支援に乗り出した滋賀県のNPOである秀明インターナショナルは、岩手県を支援することになり、私がShumei 岩手ボランティア受け入れ担当になりました。それ以来、2011年の震災後から現在まで8年間継続して、大槌町の支援に入っています。当初はがれきの撤去や炊き出し、支援物資の配布などが中心のボランティアでしたが、年数を重ねるうちに心のケアや交流を目的とするように変化してまいりました。

2012年12月、仮設住宅集会所の「お茶っこの会（被災者との交流会）」で、被災者であり仮設住宅に暮らす白澤康弘さんとの出会いがありました。秀明自然農法のお米を食べていただき、その取り組みの話題になったところ、白澤さんは「自分が手かけたこのお米をぜひ秀明自然農法で作ってほしい。そして収穫したお米の売り上げから、ほんの一部でもいいから支援金として大槌町の復旧復興のために支援

してほしい。それが自分の心からの願いです」と熱く語られました。そして白澤さんの育てているお米について、詳しくお話しいただきました。

2011年震災の年の秋、津波で何も無くなった友人宅の跡地に3本の稲穂が実っているのが見つかりました。その場所（大槌町安渡地区）は海に面したところで、近くに水田はありません。津波でどこから流されてきて、塩をかぶった土地で自然に芽吹き、逆境を乗り越えて稲穂をつけていたのです。友人よりその連絡を受けた白澤さんは、当時知り合った現地のNPOの勧めで、この稲穂からお米を作ろうと決め、翌年に本当に小さな田んぼでお米作りを始めました。ほんの5.5kgの収穫でしたが、震災後何をする気力もなく毎日を過ごしていた白澤さんは、この稲穂に出会い、米をやることで生きる力が湧いてきたそうです。その収穫の後に、私たちとの出会いがあったのです。

私たちはこの白澤さんの熱い想いに感動し、この大槌のお米を150km内陸の岩手町にある秀明ナチュラルファーム盛岡の圃場で育てようと決めました。そして2014年に初めて収穫したお米は、等級検査の検査官から「このお米の粒の形が本来の〰ひとめぼれ、です。これは現在の等級制



田植え



収穫

度では一等米だが、本来は一等米の上、特上米に値する」と感動され、同席した他の慣行農法の生産者の方々も「津波を乗り越えたこのお米には多くの人たちの想いがこもっている」と感動されました。

このお米の販売にあたりネーミングを考えたとき、被災地であるこれからの大槌町が「美しい想い・美しい絆・美しい街」へと移り変わる願いを込めて、「おおつち美し米」と名付けました。ラベルのデザインは、美を通して大槌町の未来と次世代教育に取り組んでおられる方にお願ひし、「志を同じくする」人々との温かいつながりによってこのプロジェクトが成り立っていると感じています。

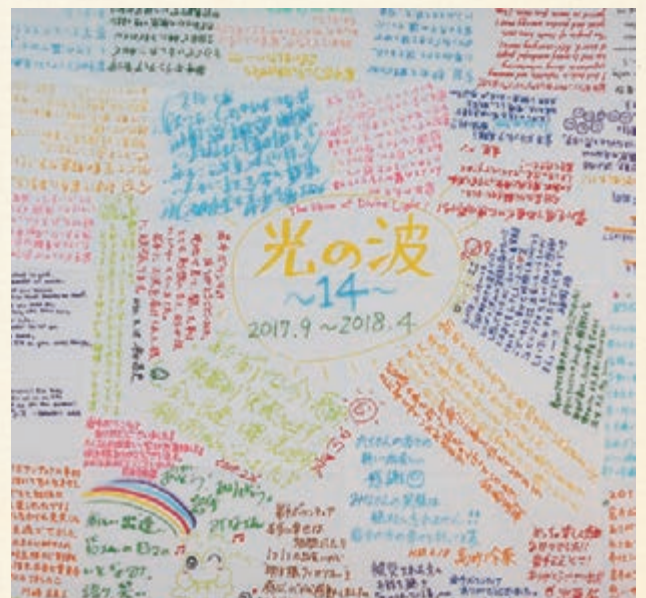
それから5年たち、現在では「おおつち美し米」から生まれた支援金は、毎年大槌町役場に町長に直接お渡しさせていただいています。収穫後には被災者の方々と試食会を開き「本当においしい!」と参加した方が感激され、また町長はじめ臼澤さんや被災者の方が遠く離れた圃場での田植えや稲刈りに参加されるなど、美し米を通してさまざまな交流が行われています。

美し米は手から手へと、ご縁を通じて手渡っていき、今では日本国内のみならずイギリスやアメリカ、香港など海外にも届けられ喜ばれています。

この「おおつち美し米」プロジェクトを通じて心から思うことは、震災から現在も続くこの Shumei 岩手ボランティアに全国・海外からも多くの方が想いをもって延べ700名が参加され、また参加できない方は各々の場所から尊い支援をしてくださり、それらの下で地道に継続してきたボランティア活動—この全体の“祈りと実りの結晶がおおつち美し米”であるということです。今後とも、Shumei 岩手ボランティア担当として感謝と学びの心で、被災地の方々と共に一歩ずつ進ませていただきます。



ラベルを貼る作業



ボランティア寄せ書きフラッグ

